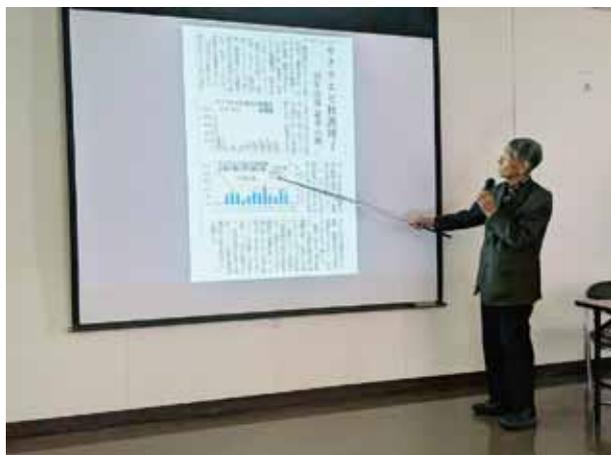


## 講演会 「駿河湾のサクラエビについて—生物・研究史・食物連鎖—」

### とふじミュージアム企画展「サクラ × さくら」の見学会 報告

高山達子



東海大学名誉教授 久保田正先生

2026年2月7日（土）13時より、ふじのくに地球環境史ミュージアム3階視聴覚室で、東海大学の名誉教授である久保田正先生による講演会「駿河湾のサクラエビについて—生物・研究史・食物連鎖—」があり約40名が聴講しました。

久保田正先生は、自然博ネットの会報にも、数多くの投稿をしていただいております。大学では、深海に生息するミズウオの研究をされていました。ミズウオの胃内容物を調べる中で、食物連鎖の観点から、サクラエビについても、いろいろ研究をされていました。

サクラエビは、静岡と台湾等での狭い範囲での生息かと思いましたが、かなり広い範囲で生息しているようです。ただまとまって漁獲されるのが駿河湾と台湾に限られているようです。これは駿河湾が岸近くで、急に深くなっている地形が大きく関係しているそうです。

サクラエビはプランクトンまたは、マイクロネクトンとして扱われ、体長は35～40mm、第2触角は体長の約2倍で、途中で直角にまがり、体と平行に伸びています。体側には160個の発光器があるそうです。

サクラエビは、明治時代頃から、甲州（現山梨県）信州（現長野県）等、エビツカ（エビのカス）という名称で、売られ

ていました。でも、エビツカではかわいそうとの事で、体色のきれいな桜色からサクラエビと呼ばれ、それが和名となったそうです。

ミズウオ以外にも、シギウナギ、タチウオなど多くの生き物がサクラエビを捕食しており餌料生物としての重要種と考えられるとの事です。一方、サクラエビは夜間に海面近くまで浮上し、珪藻類（キートセロス類）を採食しているとの事です。

駿河湾のサクラエビを語る上で、中澤毅一氏の存在は忘れられません。昭和初期、サクラエビが不漁となり、その原因究明を依頼されたのが水産講習所（現東京海洋大学）で甲殻類を専門としていた中澤氏でした。中澤氏は、サクラエビの長期調査が必要と考え現在の清水区蒲原に私設の研究所（駿河湾水産生物研究所）を設立し、サクラエビの研究や不漁の原因究明、さらに漁で得られる深海生物の収集も行ったそうです。

このように、サクラエビに関するいろいろなお話を聞くことができ、よりサクラエビを身近に感じることができました。

その後、ミュージアムの特別展のギャラリートークに移動して、渋川研究員から、さくらとサクラエビについての、いろいろなお話を聞くことができました。サクラエビの部屋では、先ほど教えていただいた、雌雄の見分け方が、顕微鏡を通して、見る事ができました。

台湾のサクラエビが遺伝的には同種であると確認されているとの事ですが、商品になったものを比べると明らかに大きさが違って、静岡産の方が大きいのがよくわかります。この違いは、生息環境等の違いから起こるとすれば、本当に駿河湾は、恵まれた、豊かな海であると思われました。